

「真性性」のエコノミーの形成から国家主義的なイデオロギーの再生へ」

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第45回目は、「真性性」のエコノミーの形成から国家主義的なイデオロギーの再生へ」と題されたご講演を Luc Boltanski 氏から賜った。

主眼は、ここ数十年の間に生じた西欧諸国の経済状況の変化が如何にして、弥増す経済格差の不平等に関係し、また更には政治的力(force)の関係の変容に影響を与えているかを明らかにすることにある。そのことは、Luc Boltanski 氏自身の重要な方法論のひとつである「批判の社会学」に基づき、言ってみれば資本主義の「正当化 justification」の言説の変容に着目することで明らかにし得る。

昨年の出版以来、大きな評判を呼んでいる Thomas Piketty の *Le capital au XXI^e siècle* で示されているように、世界の富の大半をごく一部の人が所有しているという経済的不平等の存在は現代世界において顕著である。しかし、そのような単なる物的不平等に留まらず、若年者や女性や移民たちプレカリアートの存在が象徴するような、過言を恐れずに言えば、「質的な」複合的不平等の構造を看取しなければならない。

その構造を明らかにするために、まず指摘しなければならないのは、ピエール・ブルデューが「文化資本」と呼んだものの不平等である。事実、高等教育、特に有名大学やエリート養成校の入学者の大半が特権的エリート階級出身者である現象が続いているし、それに拍車がかかってきている。高等教育が社会的地位の上昇に不可欠なものである点において、見逃せない格差拡大の一動因である。二つ目は、経済資本の格差に求められる。それは単なる収入の差ではなく、資産分配の不平等から帰結する運用可能な資産の格差である。

とはいえここで重要なのは、こういった現象の背後に着目することである。なぜなら、以上のような研究は所謂「左派」の研究者によって生み出されてきたものであるにもかかわらず、そういった研究の成果が現実の「実践」、例えば左派政権や労働運動に必ずしも強い影響を与えてきたとはいえないためである。むしろ、理論的にも実践的にも左派の衰退とは背反し、右派が「国民」を守るために、「ネオリベラリズム」と「移民」との戦いを打ち出し、勢力を拡大してきた。しかし、それは何故か。その奇妙な逆説を可能にした背景的構造を読み解かねばならないのである。

その背景的構造は資本主義自体の変容から理解できる。70年代の蓄積と利潤の危機に直面した資本主義は、80年代以降、「資本主義の新たな精神」、「新たなマネージメント」の称揚、reengineering がその擁護や正当化の言説として生み出されることで、新たなステージに立つこととなった。そして、その副次的産物として(否、寧ろそれが主目的だったかもしれないが)労働者階級の従属化が並行して生じた。いずれにせよ「資本主義の新たな精神」は「資産化 patrimonialisation」資本主義を駆動させるが、それは厄介なことに社会からの抵抗を回避することに長けている。その「正当化」のメカニズムは巧みに構築されている。

そのメカニズムの主たる特徴としては二つ挙げられる。一つは、脱産業化、産業空洞化、具体的には生産部門の海外移転、遊休地化が挙げられる。そのために、雇用者の数は著しく減少したが、それへの補償となるような政策は不十分であった。つまり手のあいた労働者、行く当てのない失業者が登場した。二つ目は、従来の資本主義にとってマージナルなもの、例えば、生活空間を彩るオブジェ、自然環境や史跡あるいはツーリズムなどを重要な商品と看做すパラダイムの登場である。これらの多種多様な商品を「商品化」する業種は比例して、多業種化し、全体の構造は極めて把握しづらい。しかし明らかなのは、そこにおけるアクターが不労所得者や給与所得者、そしてプレカリアートであることである。

最後に、それらのアクターの行動様式ともなる「資産化」資本主義の特徴を述べる。それは、従来の産業資本主義の時代における、プロトタイプの生産とは異なり、「コレク

「真性性」のエコノミーの形成から国家主義的なイデオロギーの再生へ」

ション化」という慣行である。そこでは、その目的が誇示にあるとしても、使用ではなく「蓄積」が目指され、商品価値は、従って使用する地平である「現在」ではなく、商品が「真性性 *authenticité*」の源泉とする「過去」や「伝統」によって下支えされる。そして、その「真性性」を付与するのが、「批評家」すなわち専門家や査定機関の人びとである。彼らは文化資本を多く有する人びとである。美術館や大学、諸々の文化集団に属する彼ら「批評家」が当該商品に対し「歴史的である」だとか「審美的である」といった「判断 *judgement*」を下すのである。この「資産化」資本主義における階級構造の頂点には、今述べてきたような資産を多く所持する個人や集団、一族といった人びとのみならず、そういった資産を資産たらしめる価値を付与する、上で述べた専門家集団が位置する。そして下方には、そういった人びとによって生み出された「価値の物語」に従って、諸商品をカタログ化し、展示し、あるいは見本市を運営するという様々な人びとが位置する。この人びとこそ、大半が若者であるが女性や「不法 *sans-papiers*」移民を含むプレカリアートである。

この現象が困難なのは、「物語の経済」と言い得るような「資産化」資本主義において、上記のような仕事は計量化不可能であり、確たる労働時間というものを持たず、従って、過重労働を惹起しやすいにもかかわらず、プレカリアート自身が、地位の安定を求めて強く昇進を求めているがために、「搾取」に気づきにくいからである。

そして、政治の次元においては、かかる労働者の不安を煽り、支持を獲得してきたのが昨今の躍進著しい右派、フランスでは国民戦線であるといえよう。更にこの政治現象が根深いのは、「資産化」資本主義の上層階級の人びとの支持をも受けているということである。なぜなら、彼らの有する資産は「社会の安定」によってのみ利益を得るからである。

要するに、確認すべき「資産化」資本主義時代の新たな問題は、まず、従来の産業型資本主義下の単なる物的不平等というよりは、そういった経済資本に加え、大凡それに基づくかたちで形成された文化資本によっても不平等の構造が醸成されていることである。そして、「物語の経済」とも称し得る「産業化」資本主義においては、文化資本を多く体得した「批評家」が付与する意味の体系を受けとめる形でプレカリアートらの下働きの、彼ら自身の地位の安定化希求の欲求と相乗するかたちで増進し、搾取の構造が惹起していることである。その「過去」や「伝統」の「価値」、その「物語」を重んじる時代の気分と相俟って、左派ではなく、右派が、現実の、不安を抱える労働者と社会の安定化を欲する文化エリートへの支持を獲得するかたちで躍進する。昨今の経済的文化的政治的現象はそのような構造を背景に進展しているのである。

(文責：和田昌也)